ROSSI四季報

Research Organization of Social Sciences（立命館大学BKC社系研究機構）

Rits

1999年12月

第 7 号

CONTENTS

〈巻頭言〉新世紀を前にして　平田 純一 ……1

東北アジア共同体構築の必要性と「準市場（Quasi-Markets）の経済学」　小野 進 ……2

「総合社会科学」のパラダイムを求めて：個別社会諸科学の統合化とその方向　鈴木 登 ……3

地域産業集積の類型化分析　中西 一正 ……4

OECD租税委員会報告書「有害な租税競争」の意義　坂野 光俊 ……5

社会資本の生産力効果と公共投資の地域配分　田平 正典 ……6

日本の科学技術水準と科学技術政策の新展開　安藤 哲生 ……7

黒壁10年とTMO（Town Management Organization）構想　柳ヶ瀬孝三 ……8

MIT「技術、ビジネスおよび環境」プログラム管見　池田 伸 ……9

老人医療費と医療制度の経済分析　知野 哲朗 ……10

高齢社会における健康づくりと地域づくり－「ケア」の発想からのアプローチ－　三浦 正行 ……11

「ナスダック日本進出の波紋」　村山 嘉彦 ……12

金融資産収益率のリスクの測定について　浅井 学 ……13

巻頭言

立命館大学 BKC社系研究機構
機構長 平田 純一

新世紀を前にして

来るべき新年は、西暦2000年であり、20世紀の最終年である。社会システムは、世紀単位で変化するものではないが、こうした世紀の転換点において社会システムの現況を見つめ直す必然性はあろう。ただし、1人の人間が経験し考察の対象とする社会システムの変化は100年単位よりも50年単位の方が自然である。

日本の過去50年を振り返ると第2次世界大戦後の荒廃した時代にたどり着く。1990年代の日本も、第2次世界大戦後とは意味は異なるが、経済活動が停滞し、政治体制も不安定で先の見通しの立たない時代であった。今後50年を見通せば、日本の社会システムが解決しなくてはならない課題は山積しているという状況である。

西暦2000年には、世紀代わりということで各種のイベントが企画されているが、明確な目的意識をもった本格的な現代の分析と21世紀への展望が行われることを期待したい。

私自身は、過去の50年は人口が増加した50年であったのに対して、今後の50年は人口が減少する50年になるということが、社会システムの仕組みを検討する上で最も重要なファクターではないのかと考えている。日本の人口が現実に減少に向かうのが何年からであるのかは明確になっていないが、今現在でも人口の増加はほとんど止まっており、総人口が1億3千万人に達しないうちに減少に転じることになろう。

日本の国土面積からすれば、現在の人口が多すぎるとも考えられ、人口減少それ自身が問題であるわけではない。しかしながら、高齢者になればなるほど人口が多くなる形の人口ピラミッドの下での社会システムの運営例は乏しく、これを円滑に運営することは、為政者のみならず社会科学者にとっても挑戦的な課題である。

これまでの日本では、上記の状況に関して高齢化社会と福祉・年金といったことが中心的な課題としてとらえられてきた。しかしながら、人口の減少する社会で発生する問題はこれに限られるわけではない。社会で必要とされる商品やサービスの構成にも大きな変化が生じることは明らかである。

人口減少の一つの現われ方は、自分の資産を引き継ぐ子孫がいないということである。これによって、これまでは個人資産で最重要であるとされた土地が今後も資産としての意味を持ち続けられるのか、20世紀後半に蓄積された金融資産は誰に帰着するのかといった問題を含めて考えなくてはならない。

私自身は、この1年この問題をじっくりと考え、分析上の切り口を見いだしたいと考えている。